

趣旨説明

森林総合研究所 東北支所長 駒木貴彰

木材価格の低迷などにより伐採後に造林しない、いわゆる造林未済地が各地で見られます。その最も大きな原因は、伐採収入に比べて再造林コストが高いことにあります。わが国では利用期に達した国産材の供給量を増大させて木材需要に应运て行くことが求められており、今後、皆伐作業が増加すると見込まれています。そのため、皆伐跡地への低コスト再造林技術の研究開発が重要になっています。そこで、東北地方では平成25年度から森林総合研究所東北支所を中核機関として多雪地帯での再造林コストの大幅な低減を目指した研究（農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業「東北地方の多雪環境に適した低コスト再造林システムの開発」）を進めています。この研究に対して林業界からは、研究成果の迅速な現場実証が要請されております。

そこで平成25年度は、ここ数年で急速に導入が進んでいるコンテナ苗に着目し、その成長状況や植え付け功程試験等の研究成果をご紹介するとともに、6年前からコンテナ苗を利用した試験植栽を行っている岩手北部森林管理署のご協力の下で、同署管内の試験地での現地検討会を実施しました。翌26年度は、東北森林管理局と秋田県のご協力を得て、再造林コスト削減の決め手となる伐採作業と植栽作業を同時に行う一貫作業システムと低密度植栽の現地実証試験の成果をご紹介するセミナーを開催しました。今年度は、造林作業で最もコストがかかる下刈り作業を対象に、どこまで省力化できるか、実証試験に基づく様々な取り組みをご紹介するとともに、山形県森林研究研修センターのご協力で、ワラビをカバークロップとして下刈りの省力化を図る実証試験地の現地検討会を企画しました。

過去2回実施した実証セミナーと今回のセミナーから、次のような低コスト再造林のストーリーを描くことができるでしょう。すなわち、一貫作業方式を適用してコンテナ苗を低密度で植栽し、その後の下刈りをできるだけ省略して再造林作業のコストを大幅に低減するという一連のストーリーです。今回のセミナーは、低コスト再造林技術のストーリー展開の最後に残された課題に答えるものとなります。多くの皆様から忌憚のないご意見を期待しております。